

## 第 82 回 『松江城を掘る-発掘調査半世紀の成果-』の刊行について



平成 30 年 3 月 25 日に、『松江市史』別編 1「松江城」が刊行されました。

松江城部会では、『別編 1 松江城』をわかりやすく利用してもらうために、松江城ブックレット（松江市刊行）を作成しています。その第 1 弾として刊行されたのが、『松江城を掘る-発掘調査半世紀の成果-』【左】です。著者の岡崎雄二郎先生は『別編 1 松江城』の執筆者の一人です。

松江城の発掘調査は、昭和 47 年（1972）から始まりました。岡崎先生は、この調査に最初から関わってこられました。『松江城を掘る』では、担当者でなければ知ることのできない興味深い逸話が数多く書かれています。

発掘調査の第一人者の著作なら、発掘調査の専門用語が並んでいて難しいのではないかと思われるかもしれませんが、そんなことはありません。

ページを繰ってみると、カラー写真やトレース図がたくさん掲載してありますので、写真や図を見るだけでも楽しめます。また、ルビも丁寧についてありますので、発掘調査やお城に興味のある方にはもちろんですが、中高生も楽しく読むことができます。お城や発掘に興味のある小学生もお父さんお母さんと一緒に親子で読んでみることをお勧めします。

話は変わりますが、松江城が今の姿と成るまでは様々な変遷がありました。岡崎雄二郎先生の発掘調査のお話は松江城築城の歴史から始まって、松江城の変遷についても簡単にまとめて書かれています。

松江城は、平成 24 年（2012）の松江城天守の祈祷札が発見されたことから、慶長 16 年（1611）正月までには完成したことが判明しています。松江城は、明治 6 年（1873）のいわゆる「廃城令」によって天守以外の建物がなくなりました。その後は、城山一帯が公園化されていきます。昭和の松江城の変遷についての記述は、50 代以上の方には懐かしく感じられると思います。

岡崎先生は、昭和 47 年（1972）から進められた城山の発掘調査の担当者として、最初から関わってこられました。この 1 冊には、担当だった岡崎先生の松江城発掘調査の歴史がまとめられています。

『松江城を掘る』（松江城ブックレット 1）は、わかりやすく、コンパクトに読んでいただくことを目的としていますので、ぜひ本を片手に松江城の散策を楽しんでみてください。

実は私も先日この本を広げながら松江城散策を楽しみました。まず、「松江城城郭呼称図」（『松江城を掘る』2 頁）【図 1】で城山の全体図の把握をしました。次に、「発掘調査位置図」（同 10 頁）【図 2】で城山内の昔の建物がどこに建っていて、現在はどうなっているかを歩いて確かめてみました。本文には、写真が添えられていますので、とてもわかりやすいと思いました。



【図 1】松江城城郭呼称図

【図 2】発掘調査位置図



その中でも興味深かったのは、「コラム 4：ホーランエンヤ・御神輿船（おみこしせん）の船着き場か」（同 36 頁）で、ホーランエンヤに関係していたのではないかとと思われる北総門橋の側の堀へ降りていく石段が紹介されていました。本の記述を頼りに探してみると確かに石段を探し当てることができました【図 3】。この本を読んでいなければ気がつかなかったと思いました。

【図 3】北総門橋の西側内堀沿いに姿を現した石段

「6. 北之丸の調査」（同 25～27 頁）を読みながら、松江護国神社境内を歩きました。ここでは、城内で初めての鍛冶場が発見されたそうです。築城時に城内や周辺の武家屋敷地に鉄製品を製造していたのかもしれないと思うと、「小鍛冶遺構」（同写真 34）を実際に見てみたいと思いました。もう少し詳しく知りたいと思って、『別編 1 松江城』を読むと、社務所の辺りで見つかった事がわかりました。

表紙の写真は「二之丸下ノ段の米蔵跡」の発掘調査の様子です。「発掘調査位置図」【図 2】を見ながら歩くと、米蔵跡と思われるところを歩くことができます。

最後まで読んでいくと、意外なことに松江城の本丸跡については調査がなされていないとの記述に驚きました。城主の居住施設があったと思われる本丸跡の調査がされていないのはとても残念だと思いました。

『松江城を掘る-発掘調査半世紀の成果-』（松江城ブックレット 1）は、松江城の発掘調査についてとてもわかりやすく簡単にまとめられています。松江城や発掘調査に興味のある方は、ぜひ手にとっていただけたらと思います。

（史料編纂課／石塚晶子／2019 年 6 月 25 日記）